

2026 平和行動 in 広島 報告

日程：2026年8月5日（水）～6日（木）

参加：6名（内事務局1名）



1. ピース・ウォークの中止・広島平和記念資料館の見学



当初13時から約2時間半予定をしていたピース・ウォークが熱中症警戒アラートの発令により中止となった。

そのため、急遽、広島平和記念資料館を見学することとした。

原爆がもたらした悲劇が、数字ではなく一人ひとりの物語として迫ってくる場所だと

感じた。焦げた衣服や時計、写真、遺品などから、当時の暮らしや家族との時間が突然奪われたことが伝わり、胸が締め付けられた。

それと同時に、復興した広島町の街の姿を見ると、人間の強さと平和を守る責任の重さも強く感じた。

2. 被爆81年 連合2026平和ヒロシマ集会への参加（上野学園ホール）

8月5日16時から、「連合2026 平和ヒロシマ集会」が開催された。

被爆者の平均年齢が86歳を超え、記憶の継承が急務となる中、主催者を代表して連合の芳野会長が挨拶に立った。

芳野会長は、世界に1万2000発以上の核弾頭が存在し、週末時計が過去最短の残り85秒に進むなど核の脅威が高まる現状を警告。524万筆超の署名を国連に届けたもののNPT成果文書が3回連続不採択となった厳しい情勢を指摘し、唯一の戦争被爆国である日本政府に、非人道的な核兵器の廃絶に向けた粘り強い外交努力を強く求めた。

続いて、96歳の被爆者・切明千枝子氏が登壇した。過酷な労働や、校庭での凄惨な火葬などの実相を語り、「平和は油断すると逃げてしまう」と訴えた。

これを受け、スイス派遣等を終えた高校生平和大使らが活動を報告。国際政治の対立を痛感しつつも、若者の発信力に確信を得たとし、被爆100年（2045年）を見据え「微力だけど無力じゃない」を合言葉に平和へのバトンを繋ぐ決意を述べた。

最後は、被団協のノーベル平和賞受賞を希望の光とし、核抑止論からの転換と連帯を誓う平和アピールを採択。集会は、被爆者の叫びを次世代が受け継ぎ、核なき世界へ地道に行動する決意を新たにす場となった。



3. 連合・原爆死没者慰霊式への参加（広島平和記念公園）

集会終了後、平和記念公園の原爆ドーム前に移動し、19時15分から行われた連合「原爆死没者慰霊式」に参加した。

会長らによる献花・献水の後、各地方連合の代表者が「各地域の水」を慰霊碑に献水した。その後、参加者全員が一人一輪の菊の花を献花し、原爆死没者に対して哀悼の意を表した。



4. 感想

今回、ピース・ウォークの中止は残念だったが、その分、広島平和記念資料館を見学し、原爆の悲劇を数字ではなく、一人ひとりの人生や家族との時間が奪われた現実として深く受け止めることができた。

また、平和ヒロシマ集会では、被爆者の体験や高校生平和大使の報告を通して、平和の尊さと、それを語り継いでいく責任の重さを改めて実感した。

さらに、原爆死没者慰霊式での献花・献水を通じ、犠牲となられた方々への哀悼の思いを新たにした。

私たちが安心して暮らし、働くためには、「社会が平和で安定していること」が大切であり、なぜ連合や労働組合が平和運動に取り組んでいるのかを改めて考えさせられた。